

新冠百話

第十三話

「新冠の船」(要約文)

江戸時代から昭和時代初頭にかけて主流となった船に、どのようなものがあるでしょうか。文献によると、筒船、持府船、馬船、丸木船、囀合船、蝦夷船、漁船、海舟引船などが常備されており、他に交易用の大形船が往来していたようです。今回は、昔の新冠で使われた主な舟の種類を紹介します。

- ・丸木船(まるきぶね) 丸太を割り抜いたものです。アイヌの人々は、主としてカツラ材を利用しています。
- ・持府船(もちつぶ) 丸木船の左右に柵をつけた小形の縄綴船で、岩礁の多い沿岸で用いられています。アイヌ語のモ(小さい)、チップ(船)からの呼称と言われています。
- ・筒船(どうぶね) 胴船とも呼ばれ、無柵造りの大形三半船で鰯などに使用されることが多いようです。
- ・囀合船(ずあいぶね) 船腹六尺〜七尺五寸とされていますが、新冠ではやや大きくなっています。大形の漁船で廻船としても利用されたものです。
- ・馬船(うまぶね) 馬専用のもので、船首と船尾を箱形にした川渡し船です。



丸木船：アイヌの人々がよく使っていたもの



弁財船：大型の荷物や大量の物を運ぶことに適した船。
※その他の船の形は、新冠百話に詳しく掲載されています。

- ・弁財船(べんざいせん、べざいせん) 瀬戸内海方面から見た北国通いの船ということで、北前船と呼ぶこともあります。百石積以上の大形船です。
- ・三半船(さんばぶね) 当初は無柵造りでしたが幕末期から四枚はぎになったように、錬(にしん)漁に使用されました。大形のもは長さ五十尺、幅十尺にもなりました。
- ・保津船(ほつつぶね) 三半船とほぼ同じですがやや小さく、船首にノギがついていません。
- ・川崎船(かわさきぶね) 波乗りに優れ、積荷の足が強いいため、鱈(たら)漁などの沖合漁業に使用されました。保津船よりやや小さく、帆足もすることがありました。
- ・磯船(いそぶね) 一人乗りの小舟で、持府船が原形で車權(ガイ)を用い、左右に傾きやすいことを利用して磯回り漁業に適しています。

シートベルトの全席着用

- 同乗者の着用はドライバーの義務
- 車外放出により致命傷の危険も
- 後部座席は特に危険

静内警察署

火災・救急出動状況 () かつこ内は前年同期

区分	火災件数	救急件数
5月	0件(0件)	33件(29件)
元年1~5月	3件(0件)	142件(133件)

交通事故発生状況 () かつこ内は前年同期			
区分	発生件数	死者	傷者
5月	1件(2件)	0人(0人)	1人(2人)
元年1~5月	3件(4件)	0人(0人)	3人(5人)

人のうごき

(元年5月末現在)

人口	5,521人	(前月比 - 8人)
男	2,705人	(前月比 - 3人)
女	2,816人	(前月比 - 5人)
世帯	2,762世帯	(前月比 0世帯)